

英語の与格交替現象に関する一考察

——認知文法論の英語教育への応用に向けて——

松本明美*, 藤原由美**, 山内彰***

A consideration on dative alternation in english

——Towards a theoretical application of cognitive grammar
in the japanese EFL classroom——

Akemi Matsumoto, Yumi Fujiwara and Akira Yamauchi

要約：本稿では、英語の言語現象の中でも生産性の高い与格交替を認知的な視点から考察する。与格交替とは、二重目的語構文と前置詞付き与格構文という2つの異なる統語構造の交替現象である。本研究では、与格交替現象をより深く理解できるように、与格交替現象において最も典型的な動詞である *give* の意味概念に動機づけられた様々な *give* 構文を検討することで、前置詞付き与格構文に現れる *give* 型動詞 (*to* 与格構文に現れる動詞) と *make* 型動詞 (*for* 与格構文に現れる動詞) の特徴を分析する。また、ここで得られた知見をどのように英語教育の現場に導入できるのかを検討する。

Abstract : The main topic of this paper is a cognitive analysis of dative alternation in English, which is highly productive. In English, there are two kinds of dative constructions : a double object construction or a prepositional dative variant. We aim to explore similarities and differences between *give*-type verbs (these verbs that appear in *to*-dative constructions) and *make*-type verbs (these that take a preposition *for*) through the analysis of constructions with literal and figurative GIVE proposed by Newman (1996) that will lead to a better understanding of dative alternation and discuss how some useful explanations gained in this paper should be applicable to the teaching of English grammar.

Key words : 与格交替 dative alternation 構文 construction *give* 型動詞 *give*-type verbs *make* 型動詞 *make*-type verbs 動詞 *give* の意味概念 GIVE 英語教育 teaching

1 序 論

今日、インターネットの普及によって世界中の出来事が瞬時にわかるだけでなく、

Twitter や Facebook などの SNS 媒体で世界中の人々と交流できる現代社会において、英語という言語はますます身近なものになっている。本学の教育現場において

*関西福祉科学大学 健康福祉学部 准教授

**関西福祉科学大学 社会福祉学部 非常勤講師

***関西福祉科学大学 社会福祉学部 准教授

も、インターネットを通じて英語に触れる機会が増え、英語を学習する必要性を感じている一方で、教室で学ぶ英語に対しては、暗記することが多く実用的ではないとの考えから、英語学習への意欲や興味を失っている学生は多い。この現状を打破するために、指導する側が、学生たちの英語学習の動機づけを高められるような効果的な指導法を提示する必要があるだろう。本研究では、英語の言語現象の中でも比較的よく見受けられる与格交替現象を認知的な視点から見直し、その分析を教育現場にどのように還元することができるのか、その可能性を考察する。

与格交替現象は、伝統文法ではいわゆる構文の「書き換え」として認識されている。動詞に 2 つの名詞句が後続する特殊な構造を織り成す二重目的語構文には、実際様々な動詞が現れる。以下に挙げた例は、二重目的語構文の一例である。

- (1) a. John gave Mary a book.
b. John made Mary a toy horse.

(1 a) や (1 b) を含む二重目的語構文が、前置詞句を伴った与格構文と、基本的に交替可能であることはよく知られている。

- (2) a. John gave Mary a book.
b. John gave a book to Mary.
(3) a. John made Mary a toy horse.
b. John made a toy horse for Mary.

与格交替に関わる前置詞は、(2 b) のような to 与格構文 (to-dative construction) と、(3 b) のような for 与格構文 (for-dative construction) に大きく分かれる。ここで、to 与格構文に現れる動詞を、動詞 *give* に代表されるという意味で *give* 型動詞、for 与格構文に現れる動詞を、動詞 *make* に代表

されるという意味で *make* 型動詞と呼ぶことにする。

伝統的な英文法指導法では、与格構文を第 3 文型、二重目的語構文を第 4 文型とし、両者間の交替現象を「書き換え」問題として指導されることが多いので、その結果、構文の背後にある意味概念や認知能力、また両動詞群の特徴や関連性を意識する事がないまま、個々の動詞に対応する前置詞を機械的に暗記している学習者は多いのではないだろうか。

また、両動詞群は、与格構文の前置詞選択だけでなく、受動化の文法性においても異なる振る舞いを見せる。間接目的語を主語とする受動態に変形した場合、*make* 型動詞のみ非文法的な表現となる。

- (4) a. John gave Mary a book.
b. Mary was given a book by John.
(5) a. John made Mary a toy horse.
b.* Mary was made a toy horse by John.

機械的な暗記に重点が偏ると、与格交替の前置詞選択や受動化の文法性を判断するのに時間や労力を費やすことになり、その結果、「暗記することが多い」英語学習に対する動機づけを失う傾向がある。このような学習者に対する指導法として、まずは *give* 型動詞と *make* 型動詞にはどのような特徴があるのかを明示的に説明することが効果的であると思われる。本稿では、基本的に Goldberg (1995, 2006) が主張する「構文文法」の言語観に立脚し、〈SVOO〉という表層構造に現れる最も典型的な動詞である *give* の意味概念に動機づけられた *give* 構文を分析した上で、*give* 型動詞と *make* 型動詞の両動詞群が織り成す与格交替現象を考察する。

以下、第2節では Goldberg (1995、2006)による構文文法を、第3節では Newman (1996)による「出現 (emergence)」という概念に動機づけられた比喩的な give 構文を、それぞれ先行研究として紹介する。第4節では、動詞 *give* の意味概念から *make* 型動詞への拡張関係を考察し、第5節で、この知見をどのように英語教育の現場で応用していくことが可能か検討し、今後の展望をまとめる。

2 Goldberg (1995、2006) による文法観

give 型動詞と *make* 型動詞の関連性を詳しく分析する前に、Goldberg (1995、2006)の掲げる構文文法を概観する。単語や形態素の意味から文全体の性質・構造を明らかにしようとする語彙意味論的な立場 (Pinker (1989)を参照)とは異なり、構文文法では「構文」を自立した文法単位—構成要素の意味の総和からは予測できない意味と形式から成る言語ユニットであると考ええる。また、(6)の定義にもあるように、構文文法では、構文があらゆる言語レベルで存在していると考えるので、「構文」というカテゴリーには、いわゆる文だけではなく、形態素や語や句なども含まれる。

(6) Any linguistic pattern is recognized as a construction as long as some aspect of its form or function is not strictly predictable from its component parts or from other constructions recognized to exist. In addition, patterns are stored as constructions even if they are fully predictable as long as they occur with sufficient frequency.

(Goldberg 2006 : 5)

この立場に立てば、動詞に多くの意味を記述する必要がない。例えば、構文文法で

は、二重目的語構文の統語構造とそれに対応する意味を、(7)のように規定する。

- (7) a. syntax : Subj V Obj1 Obj2
 b. semantics : Subj SUCCESSFULLY CAUSES Obj1 TO RECEIVE Obj2

Goldberg (1995)は、二重目的語構文における中心的な意味を「所有の移送の成就」と定義し、〈CAUSE-RECEIVE〉(使役—受取)という抽象的な意味を介在させることで、放射状に5つの構文¹⁾へ拡張する構文ネットワークを提案している。二重目的語構文という統語構造に現れるかどうかは「所有関係の発生」が含まれているかどうかによって左右されるので、動詞に後続する2つの目的語の間に「所有関係」が生じることが必要となってくる。つまり、二重目的語構文は間接目的語に RECIPIENT を指定する構文であることがわかる(詳しくは、児玉・野澤 (2009)を参照)。例として、動詞 *bring* の与格交替の「書き換え」を取り上げる。

- (8) a. I brought Pat a glass of water.
 b.* I brought the table a glass of water.
 (9) a. I brought a glass of water to Pat.
 b. I brought a glass of water to the table. (Partee 1965 : 60)

動詞ごとに構文を暗記しているだけでは、*bring* という同じ動詞を使用しているにも関わらず、実際には(8)と(9)のように生じる文法性の違いを理解することができない。しかし、構文文法を利用すると、*Pat* が *a glass of water* を「所有する」と解釈することは可能だが、*the table* が *a glass of water* を「所有する」ことはできないという理由で、文法性を判断することができる。実際、二重目的語構文と前置詞付き与格構文はしばしば交替可能である

が、そこには微妙な意味の差異がある (Pinker(1989)、Langacker(1991)、Goldberg (1992、1995)などを参照)。

構文の持つ意味の差異を確認するために、以下にもう一度 (2) と (3) の例文を示す。

- (2) a. John gave Mary a book.
 b. John gave a book to Mary.
 (3) a. John made Mary a toy horse.
 b. John made a toy horse for Mary.

(2 a) では、「John が Mary に a book を渡し、Mary が a book を所有した」という解釈になるが、(2 b) は「John が Mary に a book を渡した」が、Mary が a book を所有したか (受け取ったか) どうかまでは含意されない。(2 a) と同一の統語構造をもつ (3 a) の文は、Goldberg (1995) においては、中心的な構文である (2 a) の拡張の一つとして位置づけられており、“X INTENDS to CAUSE Y to RECEIVE Z” という意味を指定されているので、解釈としては「John が Mary に a toy horse を所有させることを意図して a toy horse を作成した」ことになる。(2 a) とは異なり、きちんと Mary に渡したことまで言及しないが、二重目的語構文という統語構造をもつ (2 a) と (3 a) は、両文とも「所有」という概念が存在していることがわかる。一方、for 与格構文の場合、英語の for 与格と交替する〈SVOO〉という構文が「受益二重目的語構文」と呼ばれているように、「受益」という概念を保持している。したがって、(3 b) の解釈は、「Mary に所有させるため作成した」だけではなく、「Mary の代わりに作成した」など、「作成する」という行為が Mary の利益になる限り、どのような意味解釈も可能である。

構文文法の言語観に立脚すると、二重目的語構文と to 与格構文と for 与格構文は、互いに派生関係が認められる構文ではないことがわかる。形式自体に意味が存在すると思うので、形式の違う構文には当然異なる意味が対応する。(2 a) や (3 a) のような二重目的語構文は「所有」、(2 b) のような to 与格構文は「移動」、(3 b) のような for 与格構文は「受益」という意味になる。構文文法に従えば、機械的な「書き換え」では得られない言語の根底にある法則性を実感できるのが利点である。

しかしながら、構文文法で考える構文の拡張関係を理解しているだけでは、何が与格交替の前置詞選択や受動態の文法性における差異を生じさせているのかという問いに対する十分な説明は得られない。まずは、to 与格構文と for 与格構文に現れる give 型動詞と make 型動詞の意味概念を分析することで、両動詞群が具現化する統語構造の拡張関係を探求する。両動詞群の関連性を検討するにあたって、動詞の持つ項構造情報と〈SVOO〉という統語構造が融合している典型的な動詞だと考えられる give の意味概念を吟味する。次節では、Newman (1996) によって考察された動詞 give の意味概念に動機づけられた give 構文を概観しながら、make 型動詞への拡張を動機づけるような要因を読み解く。

3 Newman (1996) による give 構文

Newman (1996) では、「与える (giving)」という行為の意味概念を GIVE と定義する。Newman (1996) が定義する意味概念 GIVE は、Langacker (2000) が提唱する認知文法の枠組みを応用したものである。また、Newman は、GIVE に関わる典型的な

ドメインを (10) のように規定している。

- (10) a. spatio-temporal domain (時空間ドメイン)
 b. control domain (コントロール・ドメイン)
 c. force-dynamics domain (力学ドメイン)
 d. domain of human interest (利害ドメイン)

Newman (1996) によると、典型的な授与行為の成立には、「授与者 (GIVER) から受領者 (RECIPIENT) へ物 (THING) が移動する」という典型的なシナリオが前提となる。ある程度連続した時間軸に沿って完了される行為であるから、その行為には空間と時間に関係し (a. 時空間ドメイン)、THING が行為達成時に GIVER から RECIPIENT のコントロール領域に存在し (b. コントロール・ドメイン)、GIVER と RECIPIENT をエネルギーの始点と終点、THING の移動をエネルギーの流れと捉えることができる (c. 力学ドメイン)。(10 d) の利害ドメインとは、その行為はどのような利害関係をもたらすのかに関わる。Newman は、「人に何かを与える行為 (= giving)」は自発的なもので、特殊な例外を除けば、ある程度 GIVER 側に好意がなければ、成立しないことが多い²⁾と述べている。図 1 で示されているように、Newman

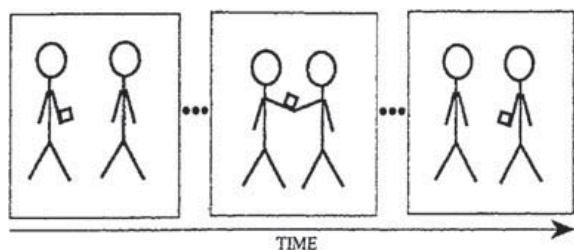


図 1 The base of GIVE-type predicates (Newman 1996: 39)

(1996) では、上記の 4 つのドメインが構成要素となり、文字通りの GIVE という意味概念を規定すると考える。

ここで定義される文字通りの GIVE とは、GIVER、RECIPIENT、THING という 3 実体が欠けることなく存在する構文を指すが、実際には 3 実体が揃わない give 構文も存在する。Newman (1996) では、その文字通りの GIVE から比喩的な GIVE への拡張関係を分析し、様々な統語構造で現れる give 構文を考察している。動詞においても構文においても「所有」という概念から切り離されない give だが、用例には差異が生じる。

- (11) a. John gave Mary a book.
 b. John gave Mary a piece of advice.
 c. John gave a party.
 d. John gave a cry.

(11 a) と (11 b) は同じ表層構造に現れるが、その意味概念はかなり異なる。(11 a) の場合、既に 3 実体 (GIVER としての John、RECIPIENT としての Mary、THING としての a book) が具体的に揃っている。これが、動詞 give の典型例である。一方、(11 b) では動詞の結果、存在していなかった THING が「出現」している。(11 c) と (11 d) においては、〈SVOO〉という統語構造ではなく、〈SVO〉という統語構造をとり、RECIPIENT が背景化している。

Newman (1996) は、「出現 (emergence)」という概念が (11 c) や (11 d) のような〈SVO〉という統語構造で具現化されることが多いと述べ、この概念は、文字通りの GIVE に備わる「GIVER の領域から THING が出現し、RECIPIENT の領域へわたる」というイメージに動機づけられたものであると主張する。Newman (1996) で

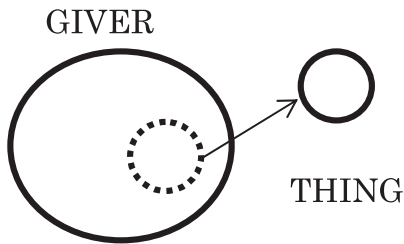


図 2 emergent GIVE のイメージ
(Newman 1996 : 147)

は、文字通りの GIVE にある「(GIVER の領域からの) 出現」という概念を広げ、「GIVER の内部からの出現」という「無から有への出現 (emergence)」に焦点をあてた emergent GIVE を図 2 のように表している。ここではトラジェクターとして機能している GIVER と THING のみがプロファイルされている。図の矢印は、GIVER の中にあった THING が行為遂行によって外へ出現することを表す。「無から有への出現」であるので、行為が遂行される前段階では GIVER の中にある THING は破線で、行為が達成された時点で外に出現した THING は実線で表現されている (詳しくは、Newman (1996) を参照)。

4 emergent GIVE と make 型動詞の関連性

以下、前節で概観した Newman (1996) における「出現 (emergence)」の概念を膨らまして、make 型動詞との関連を考察する。

3 実体 (GIVER、RECIPIENT、THING) を持つ典型的な GIVE とは異なり、make 型動詞は RECIPIENT を必ずしも必要としない 2 項動詞である。

(12) a. John gave Mary a book.

b.* John gave a book.

(13) a. John made Mary a toy horse.

b. John made a toy horse.

その目的語の意味役割は、典型的な SVO 構文における被動作主 (patient) ではなく、主語の動作によって新たに「生み出されたモノ」である。この事からも、典型的な GIVE と make 型動詞ではかなり性質が異なることがわかる。ここで、for 与格構文には具体的にどのような動詞が入るのか、Green (1974) の動詞の分類を参考にする。

(14) a. Verbs of creation : *make, cook, boil, roast, sew, knit, paint, draw, bake, . . .*

b. Verbs of selection : *buy, purchase, find, get, choose, pick out, gather, . . .*

c. Performance verbs : *sing, chant, recite, play, dance, . . .*

d. Verbs of the earn-class : *earn, gain, win, . . .*

for 与格構文に現れる動詞群の特徴として、無から有への「出現 (emergence)」といった概念がある。本研究では「出現 (emergence)」という概念を積極的に取り入れ、give 型動詞と make 型動詞の関連性を探求する。

give 型動詞では、伝達動詞 (*read, tell, teach* 等) を除けば、全て既に存在している「モノ」を相手に渡すという意味であったが、make 型動詞の場合、元々「モノ」は存在しない。この概念は make 型動詞に特有なものではなく、元は動詞 *give* に備わっている概念であることは、「出現 (emergence)」という概念に動機づけられた比喩的な give 構文から理解できる。そのような give 構文は、(15) の例に見られるようなコロケーションを保持し、統語構造上、

あたかも 2 項動詞のように振る舞う。

- (15) a. *give a party, give a lecture, give a concert, give an interview, . . .*
 b. *give an explanation, give a demonstration, give an indication, . . .*
 c. *give a smile, give a cry, give a look, give a kick, . . .*

(15) の例文における目的語は全て、動詞の結果、新たに「生み出されたモノ」であることがわかる。「パーティを開く」、「説明をする」といった出来事を言語化する時、「パーティ」や「説明」という「生み出されたモノ」には、言語単位として表層構造に存在していなくとも、RECIPIENT は概念的に保存されていると考えられる³⁾。RECIPIENT を明確にしたい場合、*They gave him a party.* のように、〈SVOO〉の形で背景化していた RECIPIENT が現れる。また、*give* が *to*-NP という着点項を従えるためには、GIVER、RECIPIENT、THING が全てプロファイルされていなくてはならないし、「モノの移動」を伴う必要があるため、「出現 (emergence)」という概念に動機づけられた比喩的な *give* 構文は、*to* 与格構文には交替しない。このように、「出現 (emergence)」という概念に動機づけられた比喩的な *give* 構文と *make* 型動詞には、〈SVO〉という統語の面においても、「無から有への出現 (emergence)」という意味の面においても類似性が見られる。

5 今後の展望

— 英文法指導への応用に向けて

give 型動詞と *make* 型動詞は、与格構文における前置詞選択や受動化の文法性において異なる振る舞いを見せる。正しい用法

で使用するために、両動詞群を使い分けなければならない。使い分けるために、両動詞群の特徴を明確に理解することが必要となる。さらに、両動詞群が同一の統語構造に現れる意味を学習することで、「理解できた」という実感が得られることが期待できる。

以下では、このような知見を具体的にどのような形で英語教育の現場において活用可能なのかについて検討する。英文法指導においては、具体的な事例で行う方が望ましいので、まずは与格交替現象に現れる最も典型的な動詞である *give* を重点的に説明する。典型的な *give* が *to*-NP という着点項を従える場合は、GIVER、RECIPIENT、THING が全てトラジェクターとして機能していなければならない。頻出度の高い 3 項動詞 (*tell*、*teach*、*show* 等) も併せて紹介し、「モノの移動」をイメージさせるよう指導することで、*give* 型動詞の特徴を定着させる。同時に〈SVOO〉という統語構造でも具現化されることを確認し、両構文間の意味の違いを認識させる。

次の段階で、同一の〈SVOO〉という統語構造に現れる *make* 型動詞の特徴を確認する。*make* 型動詞は〈SVO〉という統語構造で具現化される 2 項動詞で、動詞の項構造には「モノの移動」を伴うものではなく、目的語は「生み出されたモノ」である。頻出度の高い 2 項動詞 (*make*、*sing*、*buy* 等) を具体例に挙げながら、*make* 型動詞の特徴を確認する。自分ではなく誰かが「生み出されたモノ」を「所有」することも想定されるので、「所有」という意味を持つ〈SVOO〉という形でも使用できる。つまり、*make* 型動詞の場合、二重目的語構文における第 1 目的語はあくまでも構文

が与える項に過ぎない。他の要因を考慮する必要はあるが、前述した受動態に変形した場合に生じる差異は、二重目的語構文における第 1 目的語の項の性質の違い—動詞が持っているものか、構文が与えているかの違いによって引き起こされている可能性も考えられる。

また、「出現 (emergence)」という概念から両動詞群の関連性を認識させ、〈SVO〉という形でも具現化される比喩的な give 構文の指導を行うことで、さらなる構文理解の向上が期待される⁴⁾。構文の与格交替現象を通して、言語の根底にある法則性、また人間言語としての特質を解明することで、表層の統語構造や語句を覚えるだけでは得られない学習への達成感を実感し、「暗記する事が多い」との考えで敬遠しがちな語学学習への動機づけを高められるのではないだろうか。

ただ、英文法指導において、どの段階で、言語理論による説明を導入すれば効果的であるのかを考える必要はあろう。特に、英語学習の経験の浅い、もしくは習熟度の低い学習者に対して、まずは「書き換え」問題を通して、二重目的語構文と前置詞付き与格構文が交替可能であることを学習させることが必要である。統語構造をある程度習得した時点で、ここで考察した give 型動詞と make 型動詞の特徴を中心とした明示的な説明を行い、与格交替現象の理解へ導くことが理想であろう。

略式ではあるが本格的な調査の前段階として、本学において与格構文の前置詞選択の調査⁵⁾を実施した。予想通り、前置詞を選択する際、どちらの前置詞を選択すべきかで頭を悩ます学生が多く、正答率も低いものであった。to 与格構文と for 与格構文

を、日本語訳を頼りにそれぞれの前置詞に対応する「～の方へ」と「～のために」という意味で理解している学生が多く見られた。to 与格構文には「移動」、for 与格構文には「受益」という意味があるので、その解釈が全く間違っている訳ではないが、この時点で学生が「構文」の存在を理解しているとは言い難いと言える。また、この解釈では、「～のためにあげる」や「～のために送る」という表現でも可能になってしまうため、結局前置詞を選択する時に混乱してしまうと思われる。実際に、数多くの学生が記憶に頼って前置詞を選択していることがわかった。正しい選択ができるように、本論で考察したような 3 項動詞である give 型動詞と 2 項動詞である make 型動詞を説明し、さらに「出現 (emergence)」という概念にまで進めて指導できれば、こうした混乱は少なくなると想定される。日本語の干渉という問題も考慮すべきではあるが、習熟度の低い学生に対しては、専門用語をできるだけ使用せずに、抽象的な概念を説明する際、学生がイメージしやすい日本語の意味から「構文」や「動詞群」の意味を連想させる工夫も必要であると強く感じた。

今回は略式な調査であったが、次回は、「構文」や「動詞群」の意味を指導した上で、どの程度与格交替現象が定着するのかを本格的にデータをとり分析することで、この理論の妥当性や重要性を検討していきたい。

注

1) Goldberg (1995: 75) によると、二重目的語構文のネットワークは、(a) のプロトタイプな意味を中心とし、(b) から (f) までの下位構文へ放射状に拡張する。

- a. "X CAUSES Y to RECEIVE Z"
Example: Joe gave Sally the ball.
 - b. Condition of satisfaction imply "X CAUSES Y to RECEIVE Z"
Example: Joe promised Bob a car.
 - c. "X ENABLES Y to RECEIVE Z"
Example: Joe permitted Chris an apple.
 - d. "X CAUSES Y not to RECEIVE Z"
Example: Joe refused Bob a cookie.
 - e. "X INTENDS to CAUSE Y to RECEIVE Z"
Example: Joe baked Bob a cake.
 - f. "X ACTS to CAUSE Y to RECEIVE Z"
Example: Joe bequeathed Bob a fortune.
- 2) 〈SVO〉という統語構造で *for*-dative と結びつく動詞が具現化されることから、recipient を beneficiary と捉えることもできる。日本語では「ダメージを与える」と言えるが、英語では give と damage のコロケーション (e.g., *Acid rain *gave damage to trees.*) が容認されない。その理由として、giving (与える行為) は、利害ドメインにおいて RECIPIENT に利益を与えるような効果をもたらすことが多いという動詞 give の意味概念が関連している可能性もある。今後さらに考察を重ねる必要がある。
- 3) (15 a) や (15 b) で挙げた例文では、必ずしも RECIPIENT を言語化する必要はないことは理解できる。例えば「パーティをする」や「説明をする」行為には、「パーティ」や「説明」という出来事自体に相手がいることを想定されているからである。しかし、(15 c) における「笑う」や「泣く」は、必ずしも相手がいることを想定するような行為ではないので、同じ 〈SVO〉に現れる構文であっても同列に分析できるものではない。この点も今後の検討課題である。
- 4) 例えば、動詞 give に *for*-NP が使用されている *John gave a party for Mary.* のような文を観察した時、動詞 give には *to*-NP を使用するという単に個々の動詞ごとに暗記している知識だけでは、この文に違和感を覚えることになる。「出現 (emergence)」という概念に動機づけられた比喩的な give 構文を理解することで、*for*-NP は動詞 give に元々ある項ではなく、「受益」の意味をも

つ *for* 与格構文という統語構造がもたらしたものであると理解できる。この構文に関しては、より精緻に吟味する必要があるが、使用頻度の高い動詞 give の意味概念から、中心的な構文から周辺的な構文まで掘り下げて指導することは、構文への理解や興味を促すために有効だと思われる。

5) 実験参加者 (1年生 30名、2年生 28名) に対して、前置詞選択の問題を 8問用意した。

参考文献

- Goldberg, A. E. (1992). "The Inherent Semantics of Argument Structure: The Case of the English Dis-transitive Construction," *Cognitive Linguistics* 3: 37-74.
- Goldberg, A. E. (1995). *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The Chicago University Press. (河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子 (訳) 2001. 『構文文法論 - 英語構文への認知的アプローチ』東京: 研究社.)
- Goldberg, A. E. (2006). *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Green, G. M. (1974). *Semantics and Syntactic Regularity*. Bloomington: Indiana University Press.
- 児玉一宏・野澤元 (2009). 『言語習得と用法基盤モデル』東京: 研究社.
- Langacker, R. W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar: Descriptive Application*. Vol.2. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (2000). "A Dynamic Usage-Based Model." In M. Barlow and S. Kemmer (Eds.), *Usage-Based Models of Language*, 1-63. Stanford: CSLI Publications.
- Newman, J. (1996). *Give: A Cognitive Linguistics Study*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Partee, B. H. (1965). *Subject and Object in Modern English*. New York: Garland.
- Pinker, S. (1989). *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. Cambridge, MA: The MIT Press.